

第2回

T：前回宿題を出しました。貝塚ができる要件とは何かですが、皆さん考えてみましたか？

S：海が居住域の近くまで来ていること・・・

T：そうですね。貝には海水産のものと淡水産のもの、陸産のものもありますが、縄文海進の話をしていきますので、海が近くまで来ている、つまり海進が生活圏に及んでいるということは第一の条件かもしれません。

S：貝塚で出土する貝が生まれて成長する環境ができています・・・

T：それも大事な条件です。貝は生育環境に限定性があります。海水産の貝だから海水が及んでいればどこでも生きられるわけではなく、生息する場所が限られる。塩分濃度や海水温、波浪の強弱、潮の流れ、河川の水量、それと共に運ばれてくる土砂の堆積にも影響されます。ですから逆に貝塚から出土した貝の生息環境を調べれば、周辺の自然環境が分かる可能性があります。今日は貝塚出土の貝の中から特に主体となるハイガイ、マガキ、アサリについて少し考えてみたいと思います。他にはありませんか。

S：貝を取ることを。

T：はい、縄文人が採貝行為をしているということですね。縄文人も潮干狩りをしていたとも言える。潮干狩りは今では行楽・観光で、平安時代からの風物詩です。潮が退いている間に貝を採るといった活動が無ければ貝塚はできません。

S：貝を食べることを。

T：はい、当然食べたことは想像されますよね。しかし問題のひとつはここです。果たして貝を食べたのか。食べるために貝を採ったのか。そして貝塚とはゴミ捨て場なのか。何をいまさらと思われる方もいらっしゃるでしょう。私は平成27年に史跡黒浜貝塚の4号住居跡を調査しました。現場説明会にお越し下さった方もいらっしゃると思います。4号住居跡については現在出土遺物の整理作業が進行しています。この住居跡の貝層から出土した貝はハイガイが主体ですが、そのなかにマガキを主体とするブロックがありました（写真1）。このブロック、大きな塊でした。マガキとマガキがくっついた状態。バラバラの貝をそこにまとめたわけではないのです。塊を置いたとしか考えられない。その塊は土器に入るような塊ではなかったわけです。そしてその塊のマガキは合弁している。つまりこの一群のカキは食べた形跡が無いと言えます。したがって貝を食べたか否かは「貝塚」形成の要件とはならないのではと思います。これはゴミ捨て場としての貝塚が無いということではありません。もちろんゴミ捨て場と考えられる貝塚もあります。貝塚の在り方は決して一様ではないのではない可能性があると考えられるということです。



写真1 史跡黒浜貝塚4号住居跡貝層（※4）

さて、貝塚ができる要件ですが、ここまでで「海進が生活圏付近に及んでいる」、「水産動物が生育する環境ができています」、「そこへ縄文人が訪れ、目的は不明だが、採取行為を行う」ところまで来ました。もう一息です。

S：貝を住居跡に棄てる。

T：そうですね。先ほど言ったように、ゴミ捨て場と考えられる貝塚については最終的には「棄てる」とか「投棄」という表現が妥当でしょう。しかし、貝塚の性格がゴミ捨て場ではない場合の貝塚形成の最終段階は「棄てる」ではないでしょうね。どんな表現が適切か。ゆくゆく考えていくとして、今は「納める」という言葉を使うこととおきましょう。

それでは黒浜貝塚群から出土した貝を瞥見しながら黒浜の海を創造していきたいと思っています。ただし、これは重要なことですが、先ほど「貝塚から出土

した貝の生息環境を調べれば、周辺の自然環境が分かる可能性がある。」と言いました。貝塚出土の貝の分析がそのまま貝塚が設けられた集落付近の海辺の環境をそのまま反映しているわけではないのです。どういうことか。これは宿題に対する皆さんの答えの中に顕れています。

もう一度貝塚ができるまでのプロセスを確認します。①縄文海進が元荒川流域に達する➡②入江ができ、河口部には干潟環境が生まれ海産生物が生育する環境が整う➡③縄文人が台地を降り、干潟へ貝や魚を採りに行く➡④縄文人が食べる（食べない）➡⑤縄文人が住居跡、土坑、又は地面に貝を納める。という流れでした。①②は自然現象、③④⑤は人間活動です。特に③、どこまで採りにいったのかという平面的な問題が絡みます。近場の干潟で採貝しているとは限らないからです。最古の貝塚のひとつ夏島貝塚は集落から2 km程離れています。そして⑤では貝を納める時間幅の問題を孕んでいます。何世代にもわたり貝が納められたと考えられる貝塚もあります。このため厳密に集落周辺の海洋環境・水域環境を反映しているとは言い切れないわけです。それでも貝塚出土の貝のデータをおよその環境を推定はできるでしょう。



図7 縄文海進地形図（部分 早期～前期 ※2）

貝塚について見ていきましょう。元荒川流域に海進が及ぶのは縄文時代早期末葉、約7400年前のことです。約8,000年前に三郷市大広戸まで及んでいた海進は、そこから600年かけて黒浜貝塚群付近に侵入してきます。天神前遺跡9号炉穴出土の貝がその証左です。較正年代の結果は7418calBP(95.4%)7268calBPを示した9号炉穴の貝層の中身を見てみましょう。総出土数は583個体と小さな貝塚ですが、ハイガイが571個と突出しています。次いでカワアイが10個、マガキとオオノガイが1個ずつ出土しています。蓮田市内の最古の貝塚は、ハイガイを主体とした貝塚だということです。そのハイガイとはいったいどんな貝なのでしょう。ハイガイは温暖種のなかでも熱帯

種の泥干潟に棲む二枚貝です。現在ハイガイは1997年の有明海、諫早湾の潮止め以降日本での消息は疑われており、八代湾や有明海沖での生息報告はありますが、大陸からの養殖ものとする専門家もいます。ハイガイは南関東では約9500

カワアイ	ハイガイ	マガキ	オオノガイ	合計
10	571	1	1	583
1.72%	97.94%	0.17%	0.17%	100.00%

表1 9号炉穴出土貝種検出データ（※5）

～8700年前に出現しますが、昨年展示でも取り上げた東京大学人類学教室の酒詰仲男（さかづめなかお：考古学者 1902 - 1965）はこのハイガイと暖流の関係に注目しました。「ハイガイは石器時代の末から東京湾に居なくなるのであるが、それが地域によって差がある。実は今尚東京湾にハイガイが居ると云う説もあり、本牧附近で化石貝殻でないその死殻が折採集されることがあって、瀧庸博士（たきいさお：軟体動物学者 1898 - 1961）によれば館山湾でも折々そうした事実があり、殊に後者には黒潮の一支が侵入していて、生貝もあるかも知れぬとのことである。」（「石器時代の東京湾のハイガイ」）と記しています。つまり、「暖流の一支が東京湾内に入り込んで、それが六郷河口（現大田区六郷）をめぐって北上して流れていると云う事実は注目せねばならぬ。石器時代にも恐らく東京湾内に暖流があり、それが舊東京湾のハイガイの分布を説明するのに役立つと思われるからである。（「同上」）」として当時の館山湾でのハイガイの状況と暖流（黒潮）の関係性は、縄文時代でも変わらない

と考えたわけです。また、「ハイガイを出す遺蹟の所在を概観すると、日本海流が突き常って滞留する如き地域のみにおいて、その反対の裏になる様な場所には殆んどいない。」「殊に古利根、綾瀬川両川谷の奥や、鶴見川の一支早淵川谷の奥にある前期の貝塚にはハイガイの純貝層が見られる。」と分析されています。この論考のなかでハイガイを出土する貝塚の一覧として現蓮田市内では「東京湾 西岸地帯」として、炭釜屋敷（現炭釜屋敷貝塚・史跡黒浜貝塚）、宿（南）（現宿上遺跡）、宿裏（現新井堀ノ内遺跡）、天神前耕地（現天神前遺跡）、中耕地（現江ヶ崎貝塚）、黒濱耕地（現黒濱耕地遺跡）、新井耕地（現）、笹山（現笹山東遺跡）の地名が挙げられています。何れも市内黒浜に所在し、黒浜貝塚群を構成する貝塚遺跡の所在地（小字）です。また、ハイガイの生態について「ハイガイの生存に重大なる影響を与えるのは暖流で、次には淡水の流入量が問題であり、陸上の気候の直接の影響はない。」としました。天神前遺跡9号炉穴でハイガイと比較し出土量に差はありますが、カワアイも暖流に面した地域、暖海域の泥質干潟に生息する巻貝です。干潮時に生物遺体、微生物の死骸、それらの排泄物を元にした微細な有機物粒子、これらをデトリタスといいますが、カワアイはこれらを摂食します。これを念頭に置くと、奥東京湾中川流域のなかの元荒川流域、綾瀬川流域、日川流域にも暖流の影響が及んでいたと解釈できます。そしてハイガイの出土の消長を確認することにより、本地域の海進・海退の状況の一部が局所的にでもわかるのではないのでしょうか。次回は黒浜貝塚群におけるハイガイとマガキの消長をみていきます。

引用参考文献

- ※4 「平成27年度 史跡黒浜貝塚学術調査説明会資料」蓮田市教育委員会社会教育課
- ※5 「蓮田市文化財調査報告書第40集 黒浜貝塚群宿下遺跡・宿浦遺跡・宿上遺跡・天神前遺跡」
蓮田市教育委員会社会教育課
- ※6 「石器時代の東京湾のハイガイ」酒詰伸男